

竹中大工道具館を訪ねて

森 和夫 (職業能力開発大学校)

竹中大工道具館は三宮に近いこの地に竹中工務店が設置したものである。手のスキル研究部会の見学は「人の技が為したものは何か」を考える絶好の機会であった。

人が製作したもののつ1は作品であり、他の1つは道具である。言うまでもなく道具は人間の為しうる運動や機能の範囲を拡大させる。「道具は人間の機能の拡張」であると同時に「外界と人間との介在物」でもある。つまり機能体としての役割と緩衝体としての役割がある。この両者の役割を期待して人間は道具を扱う。

博物館の1階は「道具の歴史」をテーマに展示している。古代の道具によって法隆寺は建立された。この法隆寺までには鋸は無い。わが国最古の木造建築である法隆寺の建造の過程でようやく鋸が登場するが、その性能は未だ十分ではなく完全な機能を果たしていなかった。今日のような台鉸(だいがんな)はなく、「やりがんな」である。いわば小刀の延長である。中世になって今日の大工道具の大半が生まれた。何よりも製材法の革新がある。大鋸(おが)の伝来が建築技術の革新につながっている。「割る」、「裂く」といった「打ち割り製材」から「大鋸引き」による製材が可能になった。前者では良材でなければ製材できなかったものが、後者では材を選ばずに製材可能になったのである。近世に至ると大工仕事の分化が進行し、これに伴う道具の分化が進行した。これらを辿ると、道具は歴史の中で建造物の建立と共に発展してきたことが理解できる。これは近代建築の建設と共に工法や機械が開発されていることと同質のものと言えるだろう。

博物館の2階は「木と匠と道具」のテーマで展示している。木割り、規矩、彫刻等の基本的な施工の方法・手段の体系が確立してくる過程が見て取れる。技を技術として記述し、匠の知的な活動成果が込められている。これを具体化する技の担い手が道具であり、手の働きであるといえよう。3階は「道具と鍛冶」で展示している。收藏されている夥しい道具類、名品類は見ていて飽きがこない。一つ一つの道具製作者の意図や生み出す技がその背後に見て取れる。

手で握る道具の柄の部分について気がかりなことがあった。道具の握りの部分の断面形状である。大きく分けると楕円と円形の2種がある。よく見ると楕円のものは利き手で操作する物であるといえる。あるいは道具の使用に力を要する物は楕円になっているようである。一方、円形のもの小物道具や細工道具に多く、力を要しない物といえる。利き手でない道具という言い方もあり得る。手で道具を回しながら使用するものは円形になっているようだ。また、柄の部分の太い物と細い物とがあるが、力を要する物や両手で握るような物は太くなっている。細い柄は手の動きを機敏に行ったり、微細な動きを伴う物に多い。また、道具が使用される場面を想定しても形状を決定しているのである。柄の長さや曲がり等はこれによるところが多い。

この他に展示されていないヨーロッパの道具を見せていただく機会があった。收藏している道具は文化の相違そのものであった。基本的な形状には共通するところが多いが、基本操作の違い(押すか引くかといった違いなど)や曲面形状の多用などは独特の違いを際立たせており、文化の違いを表しているに他ならない。この道具を見て思い起こすのは三味線とバイオリンの違い、尺八とフルートの違いである。楽器の形状を少なからず連想させた。よく考えてみるとその国の文化は匠の技の文化でもあったのである。作業を通してヨーロッパの文化がその地の匠の技の文化を育てていたのである。職人的労働は1つの文化圏、エリアを形成していたと理解する方が得心がゆく。よくよく考えてみると、我々は手の労働を単に目先の現象としてとらわれている間にすっかり文化として形成されていたのである。

道具は人間の歴史、思考、経験を生活という世界で作り上げてきたものである。人間という貧相な体を脳という武器によって手に反映し、道具を作り上げてきたのだ。手は労働のための器官であるばかりでなく労働の所産でもある。その手が脳の化身であるとすれば道具はまた手の化身でもある。大工道具の歴史と技の変遷、匠の知恵というものをまのあたりにして、「人の技が為したものは何か」を考えたいときであった。

